

英雄論のなかのオリヴァ・クロムウェル
—ジョン・バンクスのクロムウェル伝を中心に—

高 濱 俊 幸

The Changing Image of Oliver Cromwell from
a Tyrant to a Hero : John Bancks' s *Short Review of
the Political Life of Oliver Cromwell*

Toshiyuki Takahama

Abstract

Thomas Carlyle, in his Lectures “On Heroes and Hero Worship and the Heroic in History” delivered in 1840, boasted of his ‘being among the first’ to glorify Oliver Cromwell as a hero rather than him having been blamed as a tyrant and a ‘fanatic-hypocrite’. However, in fact, the reappraisal started much earlier. John Bancks’ s *Short Review of the Political Life of Oliver Cromwell* published in 1739 can be seen as the earliest biography depicting Cromwell as a hero. Interpreting the biography comparatively among the literature of hero and heroism, such as William Temple’ s *Of the Heroic Virtue* (1690) and “An Essay upon Heroes” in *Cato’s Letters* (1722), as well as Carlyle’ s Lectures, it is suggested, the image of Oliver Cromwell changed in pace with the changing image of hero.

Keywords : William Temple, hero, Oliver Cromwell, John Bancks, Thomas Carlyle
キーワード : ウィリアム・テンプル, 英雄, オリヴァ・クロムウェル, ジョ
ン・バンクス, トマス・カーライル

はじめに

トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795–1881) は, 1840年の講演を基

に翌年刊行された『英雄論』(*On Heroes and Hero Worship and the Heroic in History*)で、オリヴァ・クロムウェル(Oliver Cromwell, 1599–1658)の歴史的評価が極めて低いことを残念に思い、その再評価を試みた。一般に、カーライルこそクロムウェルの歴史的地位を改めて、その評価を高めたとされる¹⁾。カーライルも、そのことを自負して次のように述べている。これまでのクロムウェルの歴史的地位は「不名誉、非難、暗黒、恥辱のなかに置かれてきた。今日、ここで、私は、彼が無頼の徒でも虚言者でもなく、真に誠実な人物である、と敢えて宣言することに先鞭をつける一人となるとして、そのことが無分別か否かを誰が知りえよう」(C454/訳349–50)²⁾。

カーライル以後19世紀末までのクロムウェル解釈を一瞥するならば、同じくカーライル編集による『クロムウェルの書簡と演説集』(1845)を活用し、「イギリス革命」におけるクロムウェルを積極的に評価したのは、若き日のトマス・ヒル・グリーンであった。グリーンは、1867年から翌年にかけての連続講義で、「クロムウェルにその特別な榮譽が与えられるべきであった」と主張し、クロムウェルに偽善的野心の汚名を負わせてきたこれまでの解釈に反対して、「王位に就こうというような低次の野望などではなく、神の御業に力を尽くしているという満ち足りた歓喜の心」を読みとった³⁾。1888年には伝記『オリヴァ・クロムウェル』が「イングランド12人の政治家」シリーズの1冊として刊行され、クロムウェルはウォルポールやピットと並ぶ政治家に格上げされた。著者フィレデリック・ハリソンは、クロムウェルによる権力追求も大義実現という「天性の政治家の義務」を果たすためであったと弁明した⁴⁾。ハリソンはまた、クロムウェルが「完璧な英雄でもなければ、汚点のない聖人でもなかった」とし、アイルランドで引き起こした虐殺事件が数世紀を経た今も忌まわしい記憶となっていると指摘しながらも、軍人としては「我が国の歴史に一人二人を数えるだけである」と高く評価し、さらに政治家としても「第一級」であったという⁵⁾。こうした急速な評価の切り上げは、まもなく、1890年には「クロムウェル崇拜者」の存在が取り沙汰され⁶⁾、さらに1899年には元首相ローズベリが私費を投じてウェストミンスター議事堂脇にクロムウェル像を建設するまでになった⁷⁾。カーライル以後のクロムウェル評価の高まりが感じられる。

では、果たしてクロムウェル再評価においてカーライルは「先鞭をつける一人」だったのかといえ、事情はもう少し複雑である。カーライルに先立

つこと1世紀以上前に、クロムウェル評価にはすでに変化の兆しがあったからである。クロムウェル評価の転換点をもっぱらカーライルに求めるような「図式はあまりにも単純である」とロジャー・ホーウェルが戒めたとおりである⁸⁾。また、いち早くクリストファー・ヒルが指摘したところによれば、再評価で先鞭を付けたのは、ナサニエル・クローチ (Nathaniel Crouch) の『オリヴァ・クロムウェルの歴史』(*The History of Oliver Cromwell*, 1688)、匿名作者による『護国卿オリヴァ・クロムウェル短評』(*A Brief Character of the Protector Oliver Cromwell*, 1692)、アイザック・キンバー (Isaac Kimber, 1692–1755) の『オリヴァ・クロムウェルの生涯』(*The Life of Oliver Cromwell*, 1724)』、ジョン・バンクス (John Bancks, 1709–1751) の『オリヴァ・クロムウェルの政治生活の概観』(*A Short Review of the Political Life of Oliver Cromwell*, 1724)』(以下『概観』) などであった。また、W・A・スペックは、名誉革命期に見られるクロムウェル像の変容が、ウィリアム3世即位の正統性への疑問、平時における常備軍維持の妥当性、モールバラ公爵の権勢への批判といった時論と関連づけられながら比較評価された結果であったことを明らかにし、キンバーによる伝記がクロムウェル像変遷の「ターニングポイント」となったと指摘している⁹⁾。しかしながら、ここで付言すれば、ホーウェル、ヒル、スペックのいずれも、本稿が注目する「英雄」概念の変遷との関係を論じない。

本稿が主たる検討対象とするのは、バンクスの『概観』である。その理由は、『概観』において、クロムウェルの根本的な再評価が「英雄論」という論述形式のなかで起こったことに注目するからである。言うまでもなく、英雄論はカーライルがクロムウェル再評価において利用した論述形式であった。要するに、本稿の基本的関心は、クロムウェルの全面的な格上げが英雄論においてなされたことの意味を考えたいということである。そのため、『概観』の外に、ウィリアム・テンブルとトマス・カーライルの英雄論にも目を向けて、英雄論の伝統のなかに『概観』を位置づける。執筆時期から言えばテンブル、バンクス、カーライルの順になるが、中間にあるバンクスを最初に取り上げ、テンブルとカーライルの英雄論はその後に論じることとする。

第1節『概観』までのクロムウェル評価

革命のイデオログとなったジョン・ミルトンは、1654年の『第2弁護論』で、「クロムウェルの類いまれなる、神にも似た美德」を持ち上げて、「クロムウェルの内にはきわめて偉大な力がもえさかっている」と書いた¹⁰⁾。『第2弁護論』と同じ年、いまだ政治に深く関わることのなかったジョン・ロックは、護国卿に就任して間もないクロムウェルを讃え、カエサルやアウグストゥスに優る「完全なる英雄」(finish'd hero)と謳った¹¹⁾。もともと、王政復古を迎えてみると、ロックは掌を返すかのように、多くの同時代人とともに共和国時代の終焉を歓迎し、「混沌に秩序を与え」たチャールズ2世をアウグストゥスと讃えた¹²⁾。その後のロックは名誉革命にいたる過程で革命のイデオログへと成長していったが、ふたたびクロムウェルを英雄と讃えることはなかった。

王政復古期のクロムウェル観については、クラレンドン伯エドワード・ハイドの『イングランド内乱史』(1702-04)に代表させることができよう。クラレンドンは、才能を持ちながら余りに邪であるとして、クロムウェルを「傑出した悪人」(brave bad man)と評し、才能と邪悪さの結合を次のように記した。「疑いもなく、何事をなすにしてもこれほどまでに邪で、宗教と道徳を憚らなかった者はほかにない。とはいえ、いかに邪であったにせよ、偉大な精神と賞讃すべき用心深さとこの上なく大きな決断力の助けがなくては、これらの栄冠を勝ちえることは決してできなかったであろう」¹³⁾。クロムウェルは「悪人」の側に位置づけられながら、高い能力を併せ持つ両義的な人物と見られたのである。

その後のクロムウェル観であるが、本稿冒頭に引用したカーライルによれば、1世紀半にわたって続く悪評の典型は、ディヴィッド・ヒュームのものであった。ヒュームは『イングランド史』(1754-62)で、クロムウェルを「詐術と偽装の大家」であり、「狂信的な熱狂」を隠れ蓑にして「邪な計画と根深い策略のすべて」を「隠し遂げた」と言う¹⁴⁾。ヒュームのクロムウェル評について、カーライルは、「狂信者・偽善者(Fanatic-Hypocrite)」というこの説はヒュームの唱えたもので、以後広く適用されている」と述べている(C446/訳338)。しかしながら、繰り返しになるが、カーライルどころか、ヒューム以前にすでにクロムウェルの再評価は始まっていて、とりわけ名誉

革命後に変化が見られた。

名誉革命後のクロムウェル評を、否定と肯定の両面において概観しておこう。ダブリン聖パトリック教会主任司祭ジョナサン・スウィフトは、1726年1月30日に、国王チャールズ1世の殉難を記念する説教で、大反乱に行き着く過程を説明しながら、クロムウェルを「暴君」(tyrant)と非難した。スウィフトは言う。内乱から国王処刑へと至る一連の出来事は、「ピューリタン」たちがメアリ女王時代に亡命先としたジュネーヴを手本に、イングランドの国家と教会を改造しようとしたことに起因する。「12年間に20数種の統治を試みた挙げ句、こともあろうにバベルの塔を建ててしまった」。しかも、彼らは「千人の暴君を立てようとしたのに、1人の暴君に服従した」¹⁵⁾。「1人の暴君」とはもちろんクロムウェルのことである。「暴君」は為政者に対する最大級の非難の言葉であったから、スウィフトにとってクロムウェルは最悪の人間であった。また、『ロンドン・ジャーナル』紙連載論説「カトーの手紙」第49号(1721年10月21日)が、クロムウェルをアレクサンドロスやカエサルと比較しながら、一括りに篡奪者(usurper)と非難したことにも触れておきたい。すなわち、「彼[クロムウェル]は疑いもなく篡奪者であった。だが小物の篡奪者である。十分に邪悪であるが、彼らと比較すれば罪のない人間である」とある¹⁶⁾。もちろん、「罪のない」とはあくまでもレトリックであり、間違ってもクロムウェルの評判を上げるための文言ではない。

クロムウェルに批判的な解釈と平行して、好意的な再解釈が始まっていた。再洗礼派のアイザック・キンバーは1724年刊の『オリヴァ・クロムウェルの生涯』で、クロムウェルを偉人として好意的に描いた。例えば、チャールズ国王処刑についても、クロムウェルを免罪しようと懸命であった。すなわち、アイアトンを初めとする共和派こそ国王殺しの首謀者であって、クロムウェルはこれとは一線を画し、国王処刑には元来躊躇していたのだが、国家と宗教を守る手立てが外にないと知って遂に同意したというのである。キンバーは、クロムウェルが「いつも実際に負うべき以上の罪と汚名を負わされている」と指摘し¹⁷⁾、クロムウェルの人物像を次のように好意的に描いた。「彼は際立った才能を持っていて、この上なく洗練された知謀に通じていた。また気概があって、とても用意周到で、利口で、大変に優れた決断力があった。戦場で勇敢に指揮するところは疑いもなく賞讃に値した。」高い

能力があっただけでなく、公共善への配慮もあった。「彼は確かに相当に野心的であったが、それと同時に、公共善への配慮に情熱を傾けた。」そして、実際に、「彼は多くの偉大で賞讃すべきことを、国民の名誉と利益のために行った。」¹⁸⁾ ここには、偽善的野心家とはまったく異なる人物像がある。

第2節 バンクスの英雄論

1739年、1冊のクロムウェル伝が出版された。著者バンクスは1709年に生まれ1751年に死去したほか詳細は不明ながら、多くの偉人伝を著した人物である。『概観』以外に、『ピョートル大帝の生涯』『モールバラ公爵の歴史』『ウィリアム3世の歴史』などの偉人伝がある。バンクス自身にピューリタニズムへの傾斜があったことは『概観』の記述からも明らかであるが、共和主義への共感がほとんどなかったことは、こうした偉人伝の目録からも容易に推測できる。『概観』は、これら偉人の1人としてクロムウェルを取り上げ、英雄として論じた。

バンクスはクロムウェルの評価が歪められている現状を、その原因の分析から始める。すなわち、激しく対立する時代を公平に評価するには、その熱が冷めてからでなければならず、人物についても同様に「長い時間」の経過を必要とする。というのも、「好意は賞讃へと高まり、悪意は軽蔑へと落ちてしまうため、直近の歴史はたいてい賛辞か風刺のどちらか」だからである。とりわけ国王処刑後の共和政期に統治に関わった者は激しい批判に晒されていて、クロムウェルはこの「ブラックリスト」の筆頭に載せられた(B5)¹⁹⁾。こうして歴史の歪曲の犠牲となったクロムウェルは「篡奪者、暴君、国賊」とされ、また「滑稽で、卑しむべき、かつ唾棄すべき」人物と誹られてきた。だが、クロムウェルが「わがイギリスの英雄」(our British hero)である事実をいつまでも偽ることはできない、と執筆意図を明らかにする(B6-7)。

『概観』の内容を見ると、場合によっては言い回しまで含めて、キンバーのクロムウェル伝が下敷きになっているのが分かる。出来事の記述から人物の評価にいたるまで、バンクスが自ら誇るほど、オリジナルの内容ではない。だからこそ、両者の内容の近似にもかかわらず、キンバーと違って、バンクスのクロムウェル伝に「英雄」という言葉が登場しているのが目に付く。バンクスは、キンバーのクロムウェル伝をもとに、それを英雄伝に書き

直したとも取れる。

革命勃発の非はスチュアート朝にあるという前提で書かれた『概観』の内容を、しばらく追っていこう。クロムウェルは「完全に良心の原則に従って、際限なく圧政の罪を犯してきた宮廷に反対して行動した」が（B20）、国王と議会のあいだの和解の可能性が失われ、国王側の挙兵によって内戦が始まった。ここで興味深いのは、クロムウェルらが国王に対して武器を取ったことについて、バンクスがジョン・ロックの『統治二論』（1689）を論拠に正当化しようとしたことである。バンクスは「君主に対して武器を取る臣民を擁護するロック氏の議論」に言及し、3箇所にとり長文を引用した。引用はいずれも『統治二論』後編の第18章「暴政について」および第19章「統治の解体について」からであった。第18章からの引用は第202節の全文にわたっていて、暴君に対する抵抗権を主張した箇所であった。残り2箇所の引用はいずれも第19章からで、抵抗権には暴力の行使が含まれると明言した第235節前半部分と、抵抗の是非を最終的に判断するのは人民であると主張した第240節全文であった（B22-25）。こうしたロックの抵抗権論の援用はキンバーにはなかったものである。

内戦中のクロムウェルについては、「勇気と結合した良識」の持ち主であったとされ（B33）、戦況の描写のなかにクロムウェルの功績が織り込まれていて、アイルランドでの残忍な戦闘さえもが容認された。そして、クロムウェルが軍事行動に携わった8年間は、「すばらしい平和と繁栄の時期」であったと締め括られ、「征服が迅速であったことでは、アレクサンドロス、もしくは彼により近いユリウス・カエサルと競いうる」とクロムウェルを古代の英雄に擬えた（B107-108）。

内戦が終わると、バンクスの叙述はその主要な舞台を戦場から議場に移す。ここで、クロムウェルを擁護しようとするバンクスにとって避けて通れなかったのは、国王処刑の責任の所在であった。バンクスによれば、クロムウェルは権力を得てから長い間、国王処刑を決意しておらず、むしろ「良心の自由」が確保されるのであれば国王権力の回復さえ図ろうとしていた（B112-113）。しかしながら、国王側の愚行によって王権回復の機会が失われてしまい、クロムウェルはレベラーズに同調せざるをえなくなった（B129）。バンクスは、このようにクロムウェルを免責した上で、国王処刑の主要な責任が「熱烈な共和主義者」アイアトンにあった可能性を示唆する

(B143-44)。これと同様の議論はすでにアイザック・キンバーのクロムウェル伝に見られたとおりである。

政治家としてのクロムウェルについては、次のように評価される。君主であれ大臣であれ、統治に関わる者は、党派が対立する状況にあって、異なる利害を調停して、自らの目的を推し進めなければならないが、クロムウェル以上にこの技術を身につけた者はいなかった (B155)。長期議会解散は「一種の無秩序」を招き、「専断的な君主制の代わりに多数者の暴政」が危ぶまれる事態をもたらしたが (B178)、クロムウェルの護国卿就任によってこの危機は回避された。バンクスは言う。「多くの事例から、芸術や科学と同様に統治においても、大天才 (a master-genius) が、通常の規則から逸脱することによって、才能を発揮してもよいような危機というものがあるのは明らかである。[中略] このような天才は時として必要である。」危機状況における例外として、護国卿就任は容認されたわけである。バンクスはクロムウェルをカエサルと二重写しにしながら、カエサルの独裁がローマにとって幸いであったのと同様に、クロムウェルの護国卿就任もイングランドに栄光をもたらしたと述べ (B179-80)、両者の類似を指摘した (B196)。

最終章では、チャールズ国王と比較しながら、「偉人」クロムウェルの人物像を「素描」する。ここでは、クロムウェルを偽善者、野心家とする批判に対して、バンクスがどう応えたかを見ておこう。クロムウェルを「大の偽善者」と見ることについては、むしろその非はチャールズの側にあったという。また、クロムウェルの野心については、「彼は確かに相当に野心的であったが、それと同時に、公共善への配慮に情熱を傾けた」し、「多くの偉大で賞讃すべきことを、国民の名誉と利益のためになした」という。これも、キンバーのクロムウェル伝の文言をほぼそのまま繰り返したものであった。ただし、バンクスはこれに言葉を継ぐかのように、クロムウェルを「最大級の偉人、英雄、人類の守護者 (the greatest of men, the heroes and patrons of mankind)」と讃えた (B271-72)。

以上に見たとおり、バンクスの『概観』は同時代のクロムウェル評価とは大きく異なっていて、ほぼ全面的にクロムウェルを讃えるものであった。しかしながら、こうした賞讃はすでにキンバーのクロムウェル伝にも見られたところであり、ここで特に注目するところではない。注目すべきはむしろ、クロムウェルを〈英雄〉と位置づけ、英雄故に例外的行動も容認されるとし

たことである。その際、しばしばカエサルやアレクサンドロスに擬えた。こうしたことはキンバーにはなかったことである。キンバーのカロムウェル伝では、カエサルにしろアレクサンドロスにしろ一度も名前が挙がっておらず、したがって、カロムウェルを彼らに擬えることもなかったし、カロムウェルを英雄と呼ぶこともなかった。それでは、バンクスにおいて、何がカロムウェルを英雄とさせたのか。

第1の可能性は、カロムウェルの時代に書かれた頌徳文 (panegyric) である。『概観』巻末に置かれた「付録6」に頌徳文がいくつか掲載されているが、そのなかにはカロムウェルを「英雄」と讃えたものがあった。その一つは、カエサルやアウグストゥスに優る「完全なる英雄」と謳ったロックの詩であるが、これについてはすでに本稿はじめて触れたとおりである。また、ロチェスタ主教トマス・スプラットの詩には、「そなたの武具は、古代の英雄たちが身につけた武具のように、そなたが崇める神より与えられたもの」という2行が見られる。さらにカロムウェルの死去に際してエドモンド・ワラーが書いた詩には、ローマの建国者ロムルスの名を挙げながら、「新しいローマ」の建国者としてカロムウェルを讃え、「死に瀕した英雄」を悼んだ。しかしながら、より重要と思われる付録資料は、ジョン・ミルトンによって書かれた賛辞である。古代の偉人たちから抽象した「完全な英雄像」 (image of a perfect hero) を基準にしたところ、これに適うのはカロムウェルを措いてはかになかったというのである。これら頌徳文の数々がカロムウェルを英雄と賛美したことが、『概観』における英雄概念利用の手掛かりとなったと考えられる。

いま一つ指摘しておきたいのは、1730年代における精神気候の変化である。このことはボリングブルク卿の『愛国王の理念』(1738) からうかがい知ることができる。「愛国王」とは、単純化すれば、墮落し弱体化した国家の再建を一身に期待された国王のことである。「愛国心」を原理として奇跡を起こす国王を描いた『愛国王の理念』は、一般に奇書の類と見られがちであるが、ここでは「愛国王」の原型が英雄論にあったことを指摘しておきたい。ボリングブルクは王権の起源を論じ、「征服」によらない場合、すなわち「全体の同意」によって王権が立てられた場合を想定して、「人類の幸福に広く用いられるような考案をした者」と「建国者、立法者、特定国家の英雄」とが生前に崇められて服従され、死後には神として祀られた、と述べて

いるのである。一般に考案者と建国者と征服者が英雄の3類型と考えられていたことは、後にテンブルの英雄論を取り上げる際に詳しく論じる予定である。とするならば、『愛国王の理念』には、国家の再建者である「愛国王」を建国者に準じて英雄論の伝統のなかに組み込もうとする意図があった、と見ることもできる。しかも、愛国王待望論は、この時代、ボリングブルク卿に留まらなかったという指摘がある²⁰⁾。バンクスのクロムウェル伝はボリングブルク卿の愛国王論と同じ英雄論の型を持っていて、キンバーのそれとは異なる時代の精神気候のなかにあったと言うことができよう。

第3節 二つの英雄論のあいだで—テンブルとカーライル—

すでに触れたとおり、バンクスはクロムウェルを「わがイギリスの英雄」と呼んだ。ところで、英雄とは何か。『オックスフォード英語辞典（第2版）』で「英雄」（hero）を引くと²¹⁾、ギリシア語由来であること、原義としては神の愛顧を得て、超人的な能力を持つ者、後に半神をも指すようになったとある。続いて、戦士の徳と関連づけられて、並外れて勇敢であったり戦功を挙げたりして殊勲のあった者とある。第3の意味として、戦士に限定せずに、際立った偉大さを発揮した者とあり、この意味で『オックスフォード英語辞典』が挙げる例文はいずれも王政復古以降のものである。また、「英雄崇拝／英雄主義」（heroism）を見ると、この言葉の登場自体が17世紀後半である。記載されている用例は全て1667年以降のものである。

『オックスフォード英語辞典』にギリシア語由来とあるとおり、英雄概念そのものは古代ギリシアに遡り、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』にその説明を見ることができる。アリストテレスはこの書で、「犠牲」と対立するものを「われわれを超えた徳」と呼び、これを「何らか英雄的な、また神的なともいうべき徳」と言い換える。そして、ホメロスにおけるヘクトルを例に挙げ、「もしひとびとの考えているごとくに抜群の徳は人間をして神たらしめるとするならば」という条件付きで、「まことに、獣類には悪徳も徳も存在しないと同じく、神においてもやはりこういったものは存在しないのであって、後者に属するところのものは徳よりもなお高貴なるもの」であると述べる。英雄は倫理的な徳を超越しているということであり、倫理学において獣性を論じないのと同じ理由から、英雄の徳は論じられなかった²²⁾。

すでに触れたとおり、英雄概念はその適用範囲を次第に拡大し、元来神的

な存在を指し示していたものが、17世紀半ば以降はより一般的に「偉人」を含むまでになった。この点で興味深いのは、ジェイムズ・ピットが『ロンドン・ジャーナル』687号（1732年8月26日）に寄稿した論説である。ピットは、英雄の名に値する人物として、ジョン・ロック、アイザック・ニュートン、サミュエル・クラーク、ウィリアム・ウォラストンを挙げ、「英雄とは人類に恩恵を施した者のみである」とその選定の理由を記している²³⁾。彼らはいずれも王政復古期から18世紀初めまでに活躍した哲学者もしくは科学者であり、神的な存在や武勲を挙げた戦士とはまったく異なる類型であった。もっとも、これらの「英雄」たちの像がキャロライン王妃によってリッチモンドの小神殿に祀られたというから、英雄の神的起源がまったく忘れ去られたわけでもなかった。

18世紀の「英雄」概念が不安定であったことは、世紀後半に刊行された2冊の辞書から窺い知ることができる。1755年刊のサミュエル・ジョンソン『英語辞典』における「英雄」の説明は、「際立って勇敢な者」と「いかなる点においてか最高の者」という二つの意味を載せていた²⁴⁾。この説明に神的要素が欠けているのは、一目瞭然である。他方、1771年刊の『ブリタニカ百科事典』では「古代神話のなかで、偉大で傑出した者、死すべき者であるにもかかわらず、民衆から不可死の性質を分け持っていると考えられ、死後に神々の仲間入りをする者」とある。こちらの説明は、いくぶん合理的にはなっているものの、原義に比較的忠実に神的要素を留めている²⁵⁾。

ここでは、主に、『概観』の前と後に書かれたイギリスの英雄論2点を取り上げた上で、改めてこれらの英雄論のあいだに『概観』を置いて考えてみたい。このことを通じて英雄論の伝統の変遷過程のなかでクロムウェルの再評価がいかに起こったかを明らかにできると考えるからである。取り上げる二つの英雄論は、17世紀末に著された外交官ウィリアム・テンプル（William Temple, 1628–1699）の英雄論と、19世紀半ばに著されたトマス・カーライルの英雄論である。両者のあいだには1世紀半の隔たりがある。

まず最初に、テンプルの『英雄の徳について』（*Of the Heroic Virtue*, 1690）に目を向ける。テンプルは冒頭から英雄を「神的と呼ばれうる栄誉を有するもの」と位置づけ、「普通の人々の目には死すべき人間を超えた何ものであるかであり、神と人の混合から生まれたと映る」と述べていて（T304–305）²⁶⁾、あくまでも原義に忠実である。より具体的な英雄の姿は3類型

に整理される。すなわち、人々の生活を向上させる考案をした者、立法によって国家の礎を築いた者、武力によって祖国を解放し征服によって拡大した者である（T304）。テンプルによれば、素朴な時代には、人々の生活を改善した考案者こそが英雄と讃えられ、その死後に神に祀られた。歴史的に見れば、こうした考案者としての英雄が最初に登場し、建国者、征服者が順に続いていったという（T306-307）。

テンプルは歴史上の偉人たちを取り上げるにあたって、〈古代=近代〉論争における古代派の論客に相応しく、古代の英雄から始めた。テンプルは最初にヨーロッパ人に馴染みの4王国を見渡す。それは以下のとおりである。ジュピターはクレテから父王サタンを追放した後、ペロポネソスやギリシアを征服し、その住民に農業と私有制度と文明を授け、公正な王国を建てたがために、神々のなかの主神として祀られることになった。エジプトのオシリスも同様である。また、リュクルゴスは「人間の権威を超えた権威」をもってスパルタを建国した。ローマ建国期のロムルスとヌマもまた建国の英雄であった。さらに、アッシリアをメディアの支配から解放してペルシャを建国したキュロスは、優れた法制度を整備し、また小アジアとリュディアを征服したことから、この上なく英雄と呼ばれるに相応しい人物である（T307-11）。

興味深いことに、アレクサンドロスは、その輝かしい征服事業にもかかわらず、英雄とはされない。飲酒と怒りと好色、さらには残虐と高慢が過ぎたこと、また統治の基礎を築いたというよりも、破壊者としての側面が勝っていたことなどが理由とされる。カエサルも同様の理由から英雄とはされない。「カエサルは、ローマ帝国の建設者であったと一般に評価されている人物であり、英雄とするに必要なすべての性質を、先天的にも後天的にも傑出して備えていたように思われているが、祖国の法と秩序を覆し、敵国ではなく同僚市民を征服して偉人となったわけであるから、名誉あるものとはなしえない」というのである（T311-12）。「偉人」はかならずしも「英雄」ではないということである。

テンプルはここでヨーロッパ人にとって未知の世界に目を向け、広く4地域の歴史に英雄の事跡を求める。テンプルは、このことを通じて、英雄論の一般化を狙ったのであろう。すなわち、東の中国、西のペルー、北のスキティア、南のアラビアである。順に見ていくと、テンプルは、中国を知識人の

支配する国と見て、建国の英雄を孔子に求めた。すなわち、「すべての中国人のなかで最も学識があり、賢明で有徳であった孔子」によって、「人類の幸福のためには、君主から貧しい農夫まで、国人すべてが善良で、賢明で、有徳であるように努力すべきである」という倫理規範が定められ（T321－24）、その規範の上にヨーロッパ人も知らないほど完成を極めた国家制度が整えられたという（T332）。

続いて取り上げられるのは、孔子同様に建国者タイプの英雄マンゴ・カパック（Mango Copac）とコヤ・ママ（Coya Mama）である。秩序も法律も宗教もなく「野獣のような生活をする」状態にあったペルー人のもとに、神の子とされるマンゴ・カパックとコヤ・ママが出現して、生活改善の技術を伝え、「リェクルゴス、ヌマ、ソロン」などに優る制度を定めた（T338－42）。さらにマンゴ・カパックは、その統治の恩恵を広めるために、周辺地域を征服した（T344－46）。

テンブルは次に眼を北方に転じて、北欧神話に登場する英雄オーディンを論じる。テンブルのオーディン論は、カーライルの英雄論との比較においても重要である。オーディンは、後にカーライルが『英雄論』第1章「神としての英雄」で大きく取り上げることとなる。テンブル論じるところのオーディンは、ゴート族を指導して広い領土を獲得した戦士、ルーン文字の発明者、建国者であった。とりわけ戦士としての側面については、「彼の死後、主神三柱の一柱として祀られ、戦いの神とされた」と記されている（T355－56）。

オーディンに続くのは、マホメットである。カーライルがオーディン論に続いて、第2章「預言者としての英雄」でマホメットを論じているのと、奇しくも一致している。ただし、カーライルと違って、テンブルのマホメット評価は高くない。『コーラン』は「彼の幻視もしくは夢から生まれたか、あるいはむしろ奇っ怪な妄想と作り話から生まれた、荒々しく狂気染みた詩のように見える」という（T371）。マホメットの後継者は別にして、テンブルはマホメットその人を英雄とはしなかった。

こうして4王国と4地域を取り上げた後は、古代ギリシア以降の英雄たちが、相当に急ぎ足で名前を列挙されていく。ここに挙がる30名足らずの英雄たちは、そのほとんどが君主であった。イギリス史上では、リチャード1世、エドワード黒太子、ヘンリ5世、ウィリアム3世の名が挙がるのみであ

る。それぞれの活躍の場としてリチャードは十字軍，エドワードおよびヘンリは百年戦争，ウィリアムは名誉革命とその後の大同盟戦争が想定されていたはずであるから，軍事面に偏った評価であった。その一方で，軍事面での活躍では引けを取らないはずのクロムウェルの名が見当たらない（T384－85）。

いま一つテンブルの英雄論の特徴を挙げるならば，征服者よりも建国者を高く評価したことである。テンブルにとって，征服者は英雄の類型の一つであったが，「英雄の徳」という観点からは建国者が上位にあるという。テンブルはその理由を説明して，「征服の企図と効果は人類の殺戮と破滅，国の略奪，世界の毀損であるに他ならないが，賢明で正しい統治は人々の生命を保護し子孫の繁栄をもたらすものだからである」と述べている。そして，大掛かりな征服と戦勝によって英雄と讃えられた者があるならば，良き統治をもたらした者は神と讃えられてきたと結ぶ（T393）。

以上に見たとおり，テンブルの英雄論は，拡大する英雄概念を考案者・建国者・征服者という3類型に整理し直したと言える。しかも，それぞれの類型の出現順序は考案者・建国者・征服者とされた。さらに，「公共善」への貢献という基準から，建国者が征服者の上位にあるとされた。ここでは考案者の位置は明らかでないが，考案者が伝説のなかで神格化されたことからすれば，考案者・建国者・征服者という序列が想定されていたとも考えられる。要するに，テンブルの英雄論は，時間的・価値的順序を併せ持つ3類型であった。テンブルは，英雄の序列においても古代の優位を主張していたことになる。

英雄としては建国者を征服者より高く評価したテンブルであったが，征服者には英雄としての資格をまったく認めないという議論もあった。興味深いところであるので，ここで簡単に紹介しておく。『カトーの手紙』第93号（1722年9月8日）は「英雄論」（“An Essay upon Heroes”）と題して，真の英雄と偽りの英雄の区別を論じた。「元来の英雄（primitive hero）」に対して，「偽りの英雄」（mock-hero）は「征服を重ねるのを本分と野心として」，「自らの利益と個人的名声のために，他人を危険にさらし死に迫りやる」者であり，古代人ではアレクサンドロスとカエサル，近代人ではフランスのルイ14世とスウェーデンのグスタフ・アドルフがそれにあたるといふ。論説はそもそも考案者を想定外としていたし，また征服者は英雄に値しないとした

から、ここでの英雄はほぼ建国者に限定されていて、英雄の類型論は見られない。すなわち、英雄とは「共同体を設立し改善し、共同体に法を教え、正義と法を破る者を罰し〔中略〕徳と立派な剛勇で手本となる生き方をした」者たちのこととされるのである。それはまた「他の人間たちに優り、神々と似通っている、中間の存在のようなものであった」²⁷⁾。18世紀初めには、英雄論がジャーナリズムの論説にまで登場したことは、注目に値する。

これから先は、『概観』以後の英雄論として、カーライルの『英雄論』を取り上げる。『英雄論』執筆の経緯は、『オリヴァ・クロムウェルの書簡と演説集』に附したチャールズ・H・ファースの「序文」に詳しい。それによれば、1822年にはすでにカーライルはクロムウェルに関心を寄せていて、関連文書を読み始めた。いったんは関心が離れたカーライルであったが、1838年にJ・S・ミルからクロムウェル論の雑誌寄稿依頼を受けて、関連する歴史研究が再開された。寄稿こそ実現しなかったものの、1840年には「クロムウェルはかつてイングランド族として生まれた者のなかで最大級の偉人の一人である」という確信を得た。この年、『英雄論』第6講演で初めてカーライルのクロムウェル研究が実を結んでいる。カーライルは、その後も研究を続け、クロムウェルゆかりの土地をしばしば訪れ²⁸⁾、1845年に『クロムウェルの書簡と演説集』を編集刊行した。以上の経緯からすれば、最初に英雄論が構想されて、そのなかにクロムウェルが位置づけられたというよりは、ピューリタン革命の歴史を書くという当初の企図から発した20年来のクロムウェルへの関心が、その後英雄論に発展したと見るべきであろう。

カーライルの『英雄論』は「社会は英雄崇拜の上に建っている」として（C245／訳19）、英雄が崇拜されない現状を嘆き、英雄の登場に期待を繋ぐものであった。『英雄論』は6章で構成されるが、これはカーライルが英雄を6種に類型化したことを意味する。すなわち、「神としての英雄」「予言者としての英雄」「詩人としての英雄」「聖職者としての英雄」「文人としての英雄」「王としての英雄」である。そして、それぞれに歴史上の実例が挙げられた。順に、オーディン、マホメット、ダンテ・アリギエーリとウィリアム・シェークスピア、マルティン・ルターとジョン・ノックス、サミュエル・ジョンソンとJ・J・ルソーとロバート・バーンズ、オリヴァ・クロムウェルとナポレオン・ボナパルトである。ほぼすべての実例がヨーロッパ世界に

取られている点で、テンブルよりも視野が狭まっている。取り上げられた総勢11人の偉人たちのなかで5人までがイングランドもしくはスコットランドの出身者であり、しかもこれら5人の英雄への評価が大変に高かった反面、ルソーやナポレオンへの評価がそれほどでもなかったことを考え合わせると、カーライル英雄論の自国中心性を疑わせる。テンブルとは1世紀半を隔てていて、いまやナショナリズムの時代を迎えていたことが背景にあったのであろう。他方で、詩人、聖職者、文人はテンブルには全く見られなかった類型であったから、この点では広がりがあった。ただし、カーライルはこれらの類型を通底して、英雄は本質的に一通りであると考えたところに特徴がある。カーライルの言葉を引くならば、「あらゆる種類の英雄は本質的に同一の素材からできている」のであり（C341／訳173）、真の偉人はあらゆる種類の英雄になる可能性をもつが、時代の環境に応じて、その類型を選ぶということである（C307／訳116）。カーライルのこうした主張は6種類のあいだの区別を曖昧にした。テンブルの3類型が比較的明確に区別されていたのとは対照的である。

カーライルの6類型それぞれを簡単に見ていこう。最初に取り上げられる「神としての英雄」は「英雄（heroism）の最も古い原始的形態」とされ（C237／訳8）、北欧神話に伝えられるオーディンを実例とした。しかしながら、オーディンのような「神としての英雄」は近代には登場しえない。「われわれは今や偉人を神と呼ぶことはないし、無制限に賛美することもない。」（C262／訳42）要するに、この類型の英雄はすでに過去のものであると、カーライルは考えたのである。ここで付言しておけば、カーライルは「戦士」を英雄の独立した類型とは考えなかったが、オーディンを論じるなかで、「戦士」という言葉を用いつつ（C264／訳45）、「勇気の聖化は悪いことではない」と述べたから（C272／訳56）、英雄の範疇から戦士を意図的に除外しようとしたわけでもなかった。第2の類型「予言者としての英雄」は「その同胞のあいだに神として仰がれることなく、神の啓示を受けたもの」と説明され、マホメットの生涯が実例とされる。しかしながら、科学的知識の発達にしたがって、この類型は「古代の産物」となり、「近代においては繰り返されるはずもない」という。対照的に、第3の類型「詩人としての英雄」は時代を問わず、古代にも近代にも生まれるという（C307／訳115）。第4の類型「聖職者としての英雄」はどうであろうか。「聖職者もまた一種

の予言者であると考えられる」が（C341-42／訳173）、本来の予言者と比べて穏やかであるという。両者の区別は不鮮明である。実際に、ノックスについて、「彼の心情は真の予言者の型である。[中略]彼は、近代のいかなる者にもまして古代ヘブライの予言者に似ている」という（C373／訳218）。カーライルは「聖職者としての英雄」の実例をルターとノックスに求めていることから、これを基本的には宗教改革期の英雄と見たのであろう。

こうして英雄の4類型を論じ終わったところで、「神、予言者、詩人、聖職者としての英雄は、古代に属する英雄の形式であり、最古の時代に出現した。それらのあるものは存在しがたいものとなって既に久しく、もはやこの世界に姿を現すことができない」と述べる（C377／訳233）。これまでの英雄出現の時期の説明とは、いささか矛盾するところが気になるが、結局のところ、19世紀半ばにあって英雄到来の期待は残り二つの類型に集まったと言えそうである。カーライルによる英雄の類型論は一種の歴史哲学を含んでいて、古代、中世、近代初期と現代とでは、それぞれのあいだに時代の断絶があった。

第5の類型「文人としての英雄」はむしろ「新しい時代の所産」であり、「将来あらゆる時代における英雄（heroism）の主要な形式の一つとして存続することが期待される」といわれているから、明らかに第4の類型までとは違っている。しかしながら、その性質について、「真の文学者」には「一種の神聖さ」があって、いわば「世界の聖職者」（world's Priest）であるとも述べられていて（C380／訳237）、類型の相違にもかかわらず英雄が本質的に同一であるという観点も忘れられていない。

さてカーライルは、最後の類型「王としての英雄」に最重要の意味を与えた。この「最重要の偉人」は「事実上われわれにとって英雄（heroism）のさまざまな姿一切の集約である」というのである（C416／訳295）。王としての英雄の出現こそ、「病める世界が今日至るところで探し求めている治療法である」とし（C419／訳299）、クロムウェルやナポレオンを時代の要請が産み出した英雄と捉える。興味深いのは、カーライルが「王としての英雄」に秩序の形成者を見ようとしたことである。一見したところ革命家型の英雄が「無政府主義者に見えるとしても」、実際には、彼らは「無秩序で混沌としたものを、規制され統制されたものへと変えるために」存在するのであり、「秩序の使徒」であるという（C423／訳305）。

第6章ではクロムウェルとともにナポレオンが取り上げられているが、その比重は圧倒的に前者にあった。クロムウェルと違ってナポレオンは真の英雄に値しなかったからである（C455／訳351）。では、クロムウェルはどう論じられ、評価されたのか。すでに、エリオット、ハムデン、ピム、ラドロー、ハッチンソン、ヴェーンら革命家がカーライルの時代までに復権していて、「一種の英雄」扱いを受けていたにもかかわらず、クロムウェルだけは「悪逆の名を解除」されずにきたという。しかしながら、カーライルに言わせるならば、ひとりクロムウェルだけが英雄の名に値する（C427-28／訳310-12）。「彼が国王の死に関与したということも、われわれが彼を論難する理由とはならない」（C433／訳318）。それは国王との戦いの必然の結果であり、「神を恐れ、神のほかには怖れるものなかった」者の「洞察力」によっているからである（C433-34／訳319-20）。カーライルによる弁護論は、キンバーやバンクスが周辺事情やアイアトン首謀説によって免責しようとしたのとは、まったく異なる論拠に基づいていた。

こうしたことと関連して、英雄の「徳」においても、強調点の移動が起っていた。すなわち、「徳（Virtue）、〈男〉〈らしさ〉（*Vir-tus*）、男子たること（manhood）、英雄たること（*hero-hood*）」は、言葉巧みで非の打ちどころのない端正さではない。それはまず「中略」勇気および事をなす能力である。この事物の根柢なるものをクロムウェルは持っていた」という（C437／訳324-25）。カーライルは「徳」（*virtue*）の起源となったラテン語の *virtus* が、「男」を意味する *vir* から派生した言葉であることに注目しながら、独特の視点で「英雄」の含意を説明しているのである。ジェンダー的視点からすれば不合理な男性優位の発言ということになろうが、実際には、日常的な倫理を超えるための「男」性の強調であったと言う方がより正しい。ここでは、英雄は「小人」（*small men*）と対比されていた。カーライルにとって、クロムウェルの「虚言」や「野心」と言われるものも、英雄を理解しない小人による非難でしかなかった。こうした非難を浴びるのは「小人のあいだにある偉人には避けることのできない境遇である」（C439／訳327-28）。クロムウェルの護国卿就任も、紛糾する事態を打開できずに無政府状態を招いた議会を前にして、危機回避のためのやむを得ない措置であった（C450-51／訳344-45）。

おわりに

言うまでもなく、「英雄」という言葉は価値判断を含み、記述対象に高い評価を下す。一般に、「英雄」は公共善に大きく貢献し、人々に幸福を与え、共同体に栄光をもたらす者に与えられる賞讃の言葉である。しかも、その貢献の大きさが常人の域を遙かに超えていることが条件となる。ときには神にまで祀られた英雄であるが、倫理基準からの逸脱を許容される一面を持っていた。カーライルは『英雄論』におけるクロムウェル評の最後を、「英雄をして休ませよ。彼〔クロムウェル〕が求めていたのは人の判断ではなかったし、人も彼を十分的確に判断しえないできた」と結んだ（C454／訳350）。英雄は「人」の理解を超えていて、倫理的な判断に服さないとすると、英雄は「徳よりもなお高貴なるもの」に従うと述べたアリストテレスを思い起こさせる。バンクスにおいては、カーライルほど明示的ではなかったが、危機的状況にあつては「通常の規則」からの「逸脱」が許されるとした点に、英雄のもつ脱倫理性の一面が示されていた。ここで三つのクロムウェル伝を執筆時期で整理し直せば、キンバーはクロムウェルの英雄性を論じることが遂になく、バンクスになって初めて英雄クロムウェルの姿が現れ、カーライルにおいてそれが十全に展開したと言える。

英雄論ではしばしば歴史への言及がある。英雄論は理論であるよりもまず歴史の集成であった。英雄には過去の事例が積み重なっていて、いつでも比較対象として呼び出すことが可能であった。このことによって、読者は共有する歴史の知識をもとに、その具体的な姿を思い浮かべるのである。とするならば、誰を歴史の実例として挙げるかで、英雄論の性質は大きく変わる。興味深いのはアレクサンドロスとカエサルの評価が安定しないことである。アレクサンドロスやカエサルを古代の英雄と見立て、これら英雄に擬えてクロムウェルを賛美する論者がいた一方、アレクサンドロスやカエサルは暴君もしくは篡奪者であるとして、そもそも英雄としての資格を認めないという論者もいたからである。繰り返しになるが、ロックはクロムウェルを讃えてカエサルやアウグストゥスに優る「完全なる英雄」と謳った。また、バンクスはクロムウェルの軍事的才能を讃えて、「アレクサンドロス、もしくは彼により近いユリウス・カエサルと競いうる」と記し、さらにローマにおけるカエサルの独裁と同様にクロムウェルの護国卿就任がイングランドに栄光を

もたらしたと讃えた。その一方で、テンプルはそもそもアレクサンドロスやカエサルに英雄の資格を与えず、クロムウェルに至ってはその名前すら挙げなかった。また、『カトーの手紙』の論者はクロムウェルをアレクサンドロスやカエサルと比較しつつ、一括りに「篡奪者」と非難した。興味深いのは、カーライルがクロムウェルを英雄と讃えながらも、アレクサンドロスにしるカエサルにしる、肯定否定のいずれにおいても文中に一度も登場させなかったことである。現代の英雄を古代の英雄や中世の英雄から切り離して考えたカーライルにあっては、これまでの英雄論とは比較基準が違ってきたという印象を受ける。

注

- 1) 『英雄論』の訳者である栗原孟男は、カーライルによるクロムウェルの再評価を「ヘラクレス的偉業」と評する。「訳者後記」371頁。
- 2) カーライルの『英雄論』は以下の資料を使用し、それぞれ略記号「T」「訳」に該当頁数を続けて、本文中に示すこととする。Thomas Carlyle, *The Works of Thomas Carlyle*, Edition de Luxe, Vol. 1, Boston, C. T. BRAINARD. トマス・カーライル, 栗原孟雄訳『英雄論』創元文庫, 1953年。
- 3) *Works of Thomas Hill Green*, Vol. 3, (ed.) R. L. Nettleship, Longman London, 1918, pp. 310, 354. トマス・ヒル・グリーン, 田中浩・佐野正子訳『イギリス革命講義 クロムウェルの共和国』未来社, 2011年, 66, 153頁。
- 4) Frederic Harrison, *Oliver Cromwell*, Macmillan, London, 1888, p. 87.
- 5) Harrison, *Oliver Cromwell*, pp. 102, 140, 167, 211.
- 6) Reginald F. D. Palgrave, *Oliver Cromwell, the Protector: An Appreciation based on Contemporary Evidence*, London, 1890, p. 2.
- 7) クロムウェル像の設置については19世紀半ばから議論があったが、1895年の議会討論が実を結んだ。この時、議会の一部に反対があり、クロムウェル像の設置はかろうじて承認されたものの、最終的には匿名の寄付者による設置となった。寄付者がローズベリ卿であったことが判明するのは、設置後のことである。
- 8) Roger Howell, "Cromwell, the English Revolution and Political Symbolism in Eighteenth-century England," in *Images of Oliver Cromwell: Essays for and by Roger Howell, Jr.* (ed.) R. C. Richardson, Manchester UP, 1993, p. 22. ホーウェルはまた、「18世紀は、実際に、クロムウェルが再評価されて、否定的シンボルから肯定的シン

- ボルへと変容する重要な時期であった」と述べ (p. 64), 18世紀の非国教系著述家3人, すなわちキンバー, バンクス, ハリスによる伝記を重要視している (p. 70.)。そして, カーライルの果たした役割については, 新しいクロムウェル像を提示したというよりは, 非国教系労働者たちのサークルで既に共有されていた肯定的クロムウェル像を, 多くの読者に広めたことにあると考える (p. 98)。
- W. A. Speck, “Cromwell and the Glorious Revolution,” in *Images of Oliver Cromwell*, pp. 50-51, 54-55, 57, 59.
- 9) Christopher Hill, *God's Englishman: Oliver Cromwell and the English Revolution*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1970, p. 266. クリストファー・ヒル, 清水雅夫訳『オリバー・クロムウェルとイギリス革命』東北大学出版会, 2003年, 374頁。
- 10) ジョン・ミルトン, 新井明・野呂有子訳『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』聖学院大学出版会, 2003年, 442頁。
- 11) John Locke, *Political Essays*, (ed.) Mark Goldie, Cambridge UP, Cambridge, 2006, p. 201. ジョン・ロック, マーク・ゴルディ編, 山田園子・吉村伸夫訳『ロック政治論集』法政大学出版局, 2007年, 61-62頁。
- 12) Locke, *Political Essays*, p. 204. 『ロック政治論集』68-69頁。
- 13) Edward, Earl of Clarendon, *The History of the Civil Wars in England*, Vol. 6, (ed.) Dunn Macray, Clarendon Press, Oxford, 1969, pp. 91, 97.
- 14) David Hume, *The History of England from the Invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688*, Liberty Classics 1983, pp. 29, 51.
- 15) *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.*, Vol. 4, (ed.) Temple Scott, London, 1898, pp. 191-92, 197. ジョナサン・スウィフト, 中野好之・海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』法政大学出版局, 1989年, 347, 353頁。
- 16) John Trenchard and Thomas Gordon, *Cato's Letters: or, Essays on Liberty, Civil and Religious, and other Important Subjects*, Vol. 1, (ed.) Ronald Hamowy, Liberty Fund, Indianapolis, 1995, p. 330.
- 17) Isaac Kimber, *The Life of Oliver Cromwell: Lord Protector of the Commonwealth of England, Scotland, and Ireland. Impartially Collected from the Best Historians, and Several Original Manuscripts*, 5th edn., 1743, London, pp. 107-109.
- 18) Kimber, *The Life of Oliver Cromwell*, pp. 386-387.
- 19) バンクスの『概観』は以下の資料を使用し, 略記号「B」に該当頁数を続けて, 本文中に示すこととする。John Bancks, *A Short Review of the Political Life of Oliver*

Cromwell, London, 1739.

- 20) Mabel Hessler Cable, "The Idea of a Patriot King in the Propaganda of the Opposition to Walpole, 1735-1739," *Philological Quarterly*, Vol. 18 (1939), 119-130.
- 21) *The Oxford English Dictionary*, 2nd. edn., Clarendon Press, Oxford, 1989.
- 22) アリストテレス, 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』下巻, 岩波文庫, 2012年, 15-16頁。
- 23) *The Reception of Locke's Politics*, Vol. 2, (ed.) Mark Goldie, Pickering and Chatto, 1999, p. 324.
- 24) Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language, in which the Words are deduced from their Originals, explained in their different Meanings, and authorized by the Names of the Writers in whose Works they are found*, 3rd. edn., Dublin, 1768.
- 25) *Encyclopedia Britannica; or, a Dictionary of Arts and Sciences, compiled upon a new Plan*, 3rd. edn., Edinburgh, 1771.
- 26) ウィリアム・テンブルの英雄論は以下の資料を使用し, 略記号「T」に該当頁数を続けて, 本文中に示すこととする。William Temple, *The Works of Sir William Temple Bart.*, Vol. 3, London, 1757.
- 27) Trenchard and Gordon, *Cato's Letters*, Vol. 2, pp. 661-66.
- 28) Charles H. Firth, "Introduction," to *The Letters and Speeches of Oliver Cromwell with Elucidations by Thomas Carlyle*, Methuen, London, 1904, xxi-xxviii. C. f., Ivan Toots, "Carlyle's Cromwell," in *Images of Oliver Cromwell*, pp. 75-79.